

「イヤ、そうやない、ア、云ふ女を女房に持つと、亭主の値打が出る。といふのは、かりに横町のぼで。やの女婢がなんやろ、黒塗の重箱や、ちりめんの袱紗に包んだある。えらい綺麗なものやなと明けて見ると中にはシヨムナイ物や、喰たかて不味い。内のお鍋は、缺けた摺鉢や、よごれた蓋がしたある。開けて見ると御馳走や、喰ふと美味い。なアきれいなんが喰へるのんなら、金魚を造りにして食べられるか、食べられへんやらう。穢ふても、おこぜの赤煮汁は美味いといふやうな物で、人間は顔のきれいなんより、やつぱり腹のきれいなんが好いので、あゝ云ふお鍋のやうな女を女房に持つと云ふのや。」

「そんなら、お前、お鍋の一件を知らんな……」

「お鍋の一件といふと。」

「知らんのなら云ふてやるが、私し此二ヶ月程前から夜、九刻過ぎると、目が醒めるのや、すると便所へ行きとなるねん。」

「オイ、暴雑に物を喰ひなや、腹を傷めたら、あかんで」

「イヤ、習慣になつたアるね、こゝ半月程前の事や宵からシト／＼雨の降つた晩があつたやろう」

「チョツと待ちや、半月程と……ウムあつた／＼」

「あの晩、今云ふ九刻過ぎに目が醒めたんや、便所へ行きたうなつたのや、けれども雨の降つた晩に

大裏まで用便に行くのがいやゝ、辛抱を仕やうと思ふても辛抱が出来ないので、やけから便所へ行かと思ひ、中へ這入つて窓から外を見ると、モウ雨は上つて月は皎々と冴へたアる、雨後の月と云ふ物は、悪々々冴へてるもんや、人間は神経で、雲を見て山やと思ふと、山に見へるもんや、龍やと思ふと、龍に見へる。お月さんの中に兎が餅を搗いて居ると思ふと、そう見へるもんや、そこで、月を見たり、雲を見たりして努張てたと思ひんかいな。そうするとなア、あの三番藏の間をジタ／＼と歩く音がするので、今頃誰が歩くのやろか、もし賊でも忍びこんだんやないかと、じつ／＼と覗いて見ると、なんの——内のお鍋や、夜の更けてあるのに、三番藏の間をながめて、さも嬉し相な顔をして、イヒ、ゝゝゝ。」

「ア、びつくりした。なんやいな。」

「さア、笑ひよつた。その聲を聞くなり、俺しもびつくりして、便所から、とんで出て、寢間の中へゴソ／＼と這入つて、頭から蒲團を冠つたんやが、後で考へると手を洗ふのを忘れた。」

「きたない男やなア」

「ア、それやつたら俺しも有るのや。」

「番頭はんも、おますか。」

「フム、恰度二三日前の事や、今云ふた時分に目がさめた、ふと見ると、お鍋の部屋がぼうと明い